


世界とつながる私たちのストーリー

【実践者】

氏名	倉沢 美穂	
学校名	栃木県宇都宮市立晃陽中学校	
対象学年	第3学年・第1学年	
担当教科等	外国語(英語)	
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年9月~2月(6時間)	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

外国語(英語)・道徳・総合的な学習の時間

2. 単元名と単元目標

① 単元名

ウガンダと出会う未来 世界とつながる私たちのストーリー

② 単元目標

ウガンダとの交流を通じ、言葉や文化の違いを超えて心が通じ合う喜びを実感させる。この経験から、世界とのつながりに目を向け、自分にできる具体的な行動を考えようとする態度を養う。

③ 関連する学習指導要領上の目標

【外国語科(英語)】

・ コミュニケーションを図る中で、言語や文化に対する理解を深めるとともに、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。(知識及び技能、学びに向かう力)

【道徳科】

・ 広い視野から公正、公平な態度で社会の発展や人々の幸福に貢献しようとする事。(国際理解、国際貢献)

・ 他者を尊重し、異なる文化や立場の人々との相互理解に努め、共に生きていくこと。(相互理解、寛容)

【総合的な学習の時間】

・ 自ら課題を設定し、情報を収集・整理・分析したり、まとめたり表現したりする学習活動を通して、自己の生き方を考えるとともに、社会の変化に対応する力を養う。

・ 社会の状況の変化に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己のあり方や生き方を考えることができるようにする。

3. 単元の評価基準

- ① 知識及び技能
ウガンダの生活・文化や世界の現状(100 人村など)について理解し、多様な素材から必要な情報を読み取る技能を身に付けている。
- ② 思考力、判断力、表現力等
交流を通して互いの違いや共通点を分析し、国際社会における自分の役割や考えを論理的にまとめて表現できる。
- ③ 学びに向かう力、人間性等
文化の違いを超えて分かり合える喜びを実感し、世界とのつながりに高い関心をもって主体的に学習に取り組む。また、他者を尊重し、共に生きようとする態度を養う。

4. 単元設定の理由・単元の意義

- ① 単元設定の理由
本単元は、世界の話をも自分事として捉え、国際社会への視野を広げるきっかけを与えることを目的とした。他者への共感と想像力を育むとともに、学びを通して得た気づきを、一歩踏み出すための具体的な行動へとつなげていく姿勢を大切にしたいと考え、設定した。
- ② 単元の意義
国際交流の機会が限られている本校の生徒にとって、異文化に触れることは、自分たちの日常を新しい視点で見つめ直す大切なチャンスであった。この研修で、私自身が現地で肌感じてきたウガンダの日常を教室に持ち込み、生徒たちの好奇心を強く揺さぶりたいと考えた。世界の問題を身近に感じ、自分たちとのつながりを見出す貴重な学習機会と位置づけた。
- ③ 児童/生徒観
生徒は素直で、行事などには一生懸命取り組むことができる。一方で、小規模校という特性上、気心の知れた仲間との安定した関係性の中で育っているため、自分の周りのことに関心が向きやすく、まだ遠い世界のことまで想像を広げる機会が少ない。本単元を通して、他者への想像力をさらに広げ、世界への関心を自分の言葉で堂々と表現できる力を伸ばしていきたい。
- ④ 指導観
世界の出来事を自分のことと感じられるよう、映像やデータ、現地の方との対話など、多角的なアプローチを行った。特に、直接的な交流を通して生まれる心のつながりを重視した。この体験で得られた新たな視点をその場限りの記憶に終わらせることなく、英語学習への意欲や、世界に対する関心をこれからも、もち続けていけるような指導に努めた。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
1	世界の真実 100 人村で知る格差 ねらい：世界の現状を数字でリアルに感じ、自分たちの生活との違いを実感する。	「世界がもし 100 人の村だったら」ワークショップ。世界の人口や富の偏りを座席数などで体感し、自分たちの当たり前の生活を振り返る。	・100 人村データスライド ・ワークシート
2	ウガンダってどんな国？ ねらい：ウガンダの基本的な情報を知り、自分たちの暮らしとの違いや共通点に興味をもつ。	写真や映像を見ながら、食事や暮らしについてクイズ形式で楽しく学ぶ。また、実際にポリタンクを運ぶ体験などを通して、現地の日常の大変さや工夫を肌で感じる。	・写真 ・動画 ・ポリタンク ・運搬用具

3 本時	違いを知る、心でつながる	写真で日本とウガンダを比較する。うちわや質問紙のやり取りを通し、言葉や文化が違って心も通じ合えることを考える。	・写真 ・うちわ ・質問紙 ・ワークシート
	ねらい:暮らしの違いを知った上で共通の感情を見つけ、お互いを尊重し合う大切さを実感する。		
4	道徳:あってよい違い、あってはならない違い	世の中の違いを、あってよいか、いけないか、どちらでもないかに分類する。議論を通し、差別や偏見のない公平な社会について考えを深める。	・道徳教材 ・ワークシート ・カード
	ねらい:自分の偏った見方に気づき、公平な社会にするために必要なことは何かを自分たちの問題として考える。		
5	国際協力の現場から届く「生の声」	JICA 海外協力隊員や現地の生徒と直接交流する。英語でのやり取りや質問を通し、現地のリアルな様子や国際協力への関心を高める。	・オンラインミーティングシステム
	ねらい:現地の人との対話を通して、異文化を尊重し合う楽しさや活動の意義を肌で感じる。		
6	私たちの世界とつながる物語	これまでの学びを振り返り、自分なりの気づきをまとめる。自分と世界とのつながりを再確認し、これからの生活で大切にしたいことを共有する。	振り返りシート ワークシート
	ねらい:一連の学習を振り返り、世界のために自分ができる一歩について考えを深める。		

6. 本時の展開

時間	3 時間目		
本時のねらい	暮らしや文化の違いを知った上で、同じ人間としての共通点を見つけ、お互いを尊重し合う大切さを実感する。		
過程(時間)	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1. 前時の授業を振り返り、印象に残ったことを共有する。 2. 本時のねらい「ウガンダの人たちと、私たちは本当にわかりあえるか？」を提示する。	前回の驚きや実感を思い出し、自分たちとの違いから本時の学習へ興味をつなげる。	
展開 (10分)	3. ウガンダの写真を見て、日本との違いを率直に話し合う。	生徒の率直な第一印象をすべて肯定的に受け止める。	【資料1】 ・写真 ・ワークシート
(10分)	4. 伝統ダンスとソーラン節の動画を比べ、共通する楽しさや一生懸命さを考える。	言葉や形は違っても、楽しむ心は同じなんだなという発見に繋げる。	・スライド 【資料2】 ・動画
(20分)	5. うちわと質問紙を対比し、「遠い国の人でも、お互いに通じ合えるのはなぜか」をグループで話し合う。	相手を尊重し、違いを楽しみながら共通点に喜ぶ生徒の素直な感性を大切にする。	【資料3】 ・うちわ 【資料4】 ・質問用紙
まとめ (5分)	6. これからも世界の人たちとつながり続けるために、大切なことは何かを考え、クラスで共有する。 7. 振り返りシートに、本時の活動を通して感じたことや自分の考えを記入する。	開発途上国の人を助ける対象ではなく、自分たちと同じ心をもつ身近な存在として捉えられるようにする。	・ワークシート

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・ 映像や資料から、日本との違いだけでなく、喜びや熱意といった共通する感情を見つけている。【知識・技能】
- ・ 暮らしの違いを越えて、同じ人間として心が通じ合えることを根拠に、お互いを尊重する大切さを考え、表現している。【思考・判断・表現】（ワークシート）
- ・ 違いを否定せずに受け止め、グループでの話し合いや振り返りに自分たちの問題として取り組んでいる。【主体的に学習に取り組む態度】（グループでの話し合い）

8. 学校外との連携

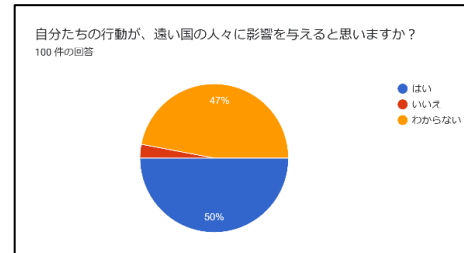
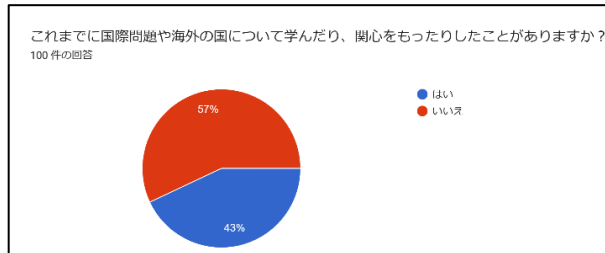
JICA 海外協力隊による出前講座を活用し、学校外の専門家と連携することで、現地のリアルな状況に基づいた多角的な学びを展開した。

9. 生徒の学びの軌跡

ウガンダの話を、生徒たちがどこか自分たちに近いこととして感じていく。そんなきっかけになればと思って、この授業を始めた。最初は「貧しい」「暑そう」といったイメージばかりだった生徒たちが、ウガンダの授業を通して、「あ、なんだ、自分たちと変わらないじゃん！」という、素直な実感をもち始めてくれた。生徒たちの心にポツと生まれたこの親近感こそが、世界の問題を自分事として考え、これから一歩踏み出すための大切な力になると信じている。

1. スタート地点:授業前の生徒の意識

事前アンケートでは、生徒の多くがウガンダに対して「貧困」や「自然がいっぱい」といった限られたイメージしかもっていないことがわかった。自分たちの生活と世界の問題がどうつながっているかについても、「よくわからない」という回答が目立ち、世界をどこか遠い存在として感じている状態からスタートした。



2. 意識の変化:授業の進行と気づき

授業が進むにつれて、生徒の意識は、ただ知識を得るだけでなく、共感し、自分自身を振り返り、行動へとつなげようとする気持ちへと、段階的に深まっていった。

授業段階	学びのテーマ	想定される生徒の振り返り・言葉(内面の変容)
1校時	世界の真実 100人村で知る格差	・ こんなにも多くの貧困があることに衝撃を受け、とても複雑な気持ちになった。 ・ 自分にとっては当たり前のことでも、他の国の人にとっては当たり前ではないことがたくさんあり、世界のためにできることを考えていきたいと思った。 ・ 私たちが恵まれた環境で生活していることを改めて実感した。
2校時	ウガンダってどんな	・ ウガンダが涼しいことに驚いた。 ・ ウガンダは全く日本に関係ないと思っていたけど、日本の車があったり、日本食が食べられたり、日本に関係していることが分かった。

	国？	・ 水汲みを毎日やっているウガンダの人たちはすごいと思った。水道の生活に比べて、日本の水を使いすぎていると思った。
3 校時	違いを知る、心でつながる	・ 貧しいし、水がないし、大変だけど、兄弟の数が一緒だったり、サッカーが好きだったり一緒だったから、よかった。 ・ 最初はウガンダより日本の方がいいと思ったけど、好きなものや笑うところは自分たちと似ていて、親近感がわいた。 ・ 難民がいたり、水道がなかったり大変だけど、質問に答えてもらったり、一緒にソーランを踊ったりしているのを見たら、その大変さが感じなくて、楽しそうだったのが印象に残った。
4 校時	あってよい違い、あってはならない違い	・ 生まれた国が違うだけで、10歳で働かなければならなかったり、寿命が短かったりするの、絶対にあってはならない違いだと思った。 ・ 人によって考え方が違っておもしろかった。不公平なことを見つけたとき、自分には関係ないと思わないようにしたい。 ・ 好き嫌いや伝統はいいけど、誰かが損をしたり、やりたいことができなくなったりするのはダメだと思った。
5 校時	ウガンダの生徒と交流	・ 現地との調整が整わず、報告期間内に実施することが困難となった。そのため、2月に延期して実施することとし、今回は当初予定していた6校時の内容を繰り上げて行った。
6 校時	私たちの世界とつながる物語	・ 世界が身近に感じられるようになった。自分たちにできることは小さくても、まずは知ることや周りに伝えることが必要だと思った。 ・ 最初は貧しいからかわいそうだと思ったけど、そうじゃないことがわかった。もっと話したり、見たり、他のこととかも知りたくなった。 ・ 何ができるか分からないけど、自分にもできることがあるのかもと思った。相手の立場になって一緒に考えることから始めて、世界について考えていきたい。 ・ 言葉や文化が違ってても、一緒に笑ったり驚いたりできる。世界の問題は、遠い国じゃなくて自分たちの仲間のことなんだという考えが印象に残った。 ・ 英語の授業でやったエシカルファッションとかフェアトレードとか関係ないと思ってたけど、もっとできることがあるのかもって思った。

3. 最終的な気づき：前向きな気持ちと行動の芽生え

今回の授業を通し、生徒たちの中に、国際的な課題を少しずつ自分たちの生活に関わることとして捉える姿勢が芽生えてきた。ウガンダの生活を知ったことで、「水を出しっぱなしにしないようにしよう」「食べ物を大切にしよう」など、日々の当たり前の生活を見直そうとする姿が一部の生徒に見られた。

また、全員がすぐに意識を変えるのは難しいものの、「世界の問題にこれからも興味をもっていたい」「いつか自分の目で世界を見てみたい」といった、前向きな好奇心をもつ生徒も出てきた。相手を遠い存在として見るのではなく、自分と同じように生きている誰かとして想像し、共に向き合おうとする空気が、教室の中に少しずつ広がり始めている。

10. 自己評価

① 成果が出た点

- ・ 生徒が授業を楽しみにする姿：「先生、今日はウガンダの授業？」と声をかけてくるなど、遠い国の話を身近に楽しもうとする意欲が見られた。
- ・ 知ることの価値の発見：「まずは相手を知ることが大切」という言葉に象徴されるように、表面的な情報だけでなく、相手の背景にまで思いを馳せようとする姿勢が見られた。
- ・ 自分たちの足元を見直す視点：ウガンダの生活を知ること、日本の当たり前を見つめ直し、水や食べ物を大切にしようという具体的な気づきに繋がった。

② 苦勞した点

- ・ 自分の役割への悩み：自分が見てきたものを、どう伝えれば生徒の心に残るのかという自問自答の連続であった。単なる知識の伝達ではなく、自分は何を伝え、何ができるのかという答えを見つけるまでの教材研究に一番苦勞した。

- ・情報の受け止め方の深さ：初めて知る情報が多く、驚きや楽しさで終わってしまう場面もあった。そこから一步踏み込んで、背景にある事情や人々の思いを想像させる手立てに工夫が必要だと感じた。
- ・生徒の熱を逃さない授業づくり：外部との調整や行事の確認に手間取り、授業の間隔が空いてしまう場面があった。生徒たちの関心が高まっている瞬間に、その勢いのまま一気に学びを深めていけるような授業計画をすることが課題であった。

③ 改善点

- ・研修前からの事前準備と連携：研修前から実践のイメージを膨らませ、ウガンダの生徒や隊員の方とのやり取りを早めに相談しておくことが必要であった。そうすることで、授業の中で生徒の「もっと知りたい！」という好奇心が一番高まった流れのまま、単元のねらいに迫ることができた。

④ 自由記述

今回の実践を通し、国際的な課題を自分事として生徒に深く捉えさせる難しさを実感した。知識の定着や思考を深めるための指導法など、私自身にとっても多くの課題が見つかった。

一方で、生徒から「世界の問題をもっと知りたい」「日本の生活を見直したい」といった前向きな変化が見られたことは大きな成果であった。生徒の中に、世界への関心と自分たちの問題という意識が少しでも芽生え始めたことは、今後の指導への手応えとなった。

この経験を糧に、生徒が広い視野をもち、世界の問題を自分ならどう考えるかと一緒に悩めるような授業を目指したい。これからも生徒と共に学び、国際理解教育の充実に努めていきたい。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- 情報発信：国際教育だよりを発行し、研修や授業の様子を全校や保護者へ伝えた。学校全体で世界を身近に感じるきっかけをつくった。
- 展示活動：新聞記事や現地の楽器などを校内に展示し、写真や実物を通じて、ウガンダを身近に感じるきっかけをつくった。
- 社会貢献：おにぎりアクションに参加。授業での気づきを、自分たちにできる身近な一歩として、具体的な行動に移す経験とした。
- 図書館連携：学校司書と連携し、国際理解に関する本を紹介する特設コーナーを設置した。授業で興味をもった生徒が、自ら知識を深められる環境を整えた。
- 地域交流：栃木の紹介記事を作成し、ウガンダの生徒や修学旅行先での交流に活用。郷土の魅力を再発見し、自分たちの力で世界とつながる喜びを経験した。



情報発信

展示活動



社会貢献

図書館連携

地域交流

12. 自由記述

今回の研修では、世界というものの面白さを改めて感じる事ができた。また、人種や地理的な距離を超えて、遠く離れた場所においても、人の優しさ、笑顔そして願う幸せは同じだということ、知識としてではなく肌で直接実感した。一方で、この貴重な学びを、どう生徒たちや同僚の先生方に還元していくか、その授業実践のあり方を考えることは、とても難しく、大きな課題となった。今回の授業で、私が伝えたいことが生徒たちに届いたかどうかはわからない。しかし、一人でも何かを感じ、世界への興味をもってもらったのなら、本当に嬉しく思う。そして、この実践から得た一番大切な学びは、国際理解教育とは、教え込むのではなく共に驚き、共に考えていくものだということだった。教師海外研修に参加させていただき、この貴重な経験に心から感謝している。ウガンダで出会ったあの笑顔を思い出しながら、これからも生徒と一緒に、世界のことをもっと知り、考え、みんなで楽しみながら、授業をつくっていきたい。

13. 参考資料

資料名	著者名等	出版元、URL 等
ワークショップ版世界がもし100人の村だったら	開発教育協会	開発教育協会
希望のダンスエイズで親をなくしたウガンダの子どもたち	渋谷敦志	Gakken
ウガンダを知るための53章	吉田正夫 白石壮一郎	明石書店
中学道徳 3 きみが いちばん ひかるとき「深めたいむ(ぼくの物語 あなたの物語)」		光村図書

14. 本時で使用した資料

【資料1】 スライド



【資料2】 動画



【資料3】 ウガンダの生徒が書いたうちわ



【資料4】 日本の生徒が作った質問用紙

